

ハイドン (Franz Joseph Haydn) (1732 ~ 1809) [第 3 回目]

文責：どくとるA

ハイドン解説3回シリーズの最終回となる今回は、いよいよ天地創造を作曲する時期である「ロンドン滞在と晩年」をお送りします。

[ロンドン滞在と晩年]

1790年、ニコラウス侯が没するが、その子パウル・アントン侯は音楽を好んでおらず、ハイドンの地位とその年金はそのままにしておいたものの、何も明確には要求しなかった。そのために自由となったハイドンは、ロンドンの興行師でヴァイオリン奏者のヨーハン・ペーター・ザロモンの招きで、初めて故国を離れロンドンへと渡った。このロンドン訪問でハイドンは新作の6曲の交響曲を作曲し、新作コンサートを催して大成功する。ロンドン滞在は1年以上におよんだが、名の上でも実質上も(この訪問でハイドンはかなりの利益を得た)大きな成果を得、のちに再びロンドンを訪問することになる。2度目のロンドン訪問でも新たに6曲の交響曲を発表し、これら合わせて12曲の交響曲(第94番「驚愕」、第100番「軍隊」、第101番「時計」など)は「ロンドン・シンフォニー」あるいは「ザロモン交響曲」と呼ばれている。

ロンドンには、当時ヨーロッパでもっとも進んだ都会で、それはウィーンでは考えられなかった一般市民のための演奏会が実に頻繁に開かれていたという事実からもうかがえる。実際、ハイドンの収入の多くはこうした演奏会の収益だった。イギリスではすでに市民階級が趣味として音楽を聴きに來るという習慣ができていた。それまでの長い時間を田園の中に建つエステルハーゼ侯邸で過ごしてきたハイドンにとって、ロンドンは想像を絶する大都会であり、またウィーン以上に耳の肥えたしかも非常に多くの大衆に音楽を聴かせるというまったく異質の経験をもたらした。そしてまたハイドンは、かつてその後半生をロンドンで過ごしたヘンデル (Georg Friedrich Händel, 1685 - 1759) の作曲したオラトリオ「メサイア Messiah」(ハレルヤ・コーラスで有名)を聴き、非常に感激した。この感動がのちの傑作オラトリオ「天地創造」を生み出す動機になった。

最終的にオーストリアに帰還したとき、ハイドンはヨーロッパ全体において存命中の最も偉大な作曲家とみなされていた。エステルハーゼ家では侯爵位がニコラウス2世に代わり、彼は、威信のためもあって、祖父であるニコラウス侯の宮廷楽団を再び組織することを決めた。ハイドンは再びこの宮廷の楽長となったが、以前と比べるとはるかに責務が軽くなった。夏の2、3ヶ月間だけアイゼンシュタットに滞在し、残りはウィーンに住み、自分が望むものを作曲することができた。こうした曲の中に、2つの壮麗なオラトリオ「天地創造 (1798)」と「四季 (1801)」がある。

1804年以降、ハイドンは、1793年にウィーンのグルペンドルフ街に手に入れた家をほとんど離れることはなかった。そして、ハイドンは、1809年5月31日にグルペンドルフ街の自宅で死去した。

[ミニコラム 1: ハイドンとモーツァルト (1756 - 1791)、ベートーヴェン (1770 - 1827)]

ハイドンとモーツァルトは 1785 年頃から親交を持ち始め、20 以上の年齢差を超えてお互いに尊敬し合っていた。モーツァルトが世を去った時、彼の真価を本当に理解していたのはハイドン一人だったとも言われる。モーツァルトが、ハイドンの弦楽四重奏曲に感動して、その形式にならって作曲した 6 曲の弦楽四重奏曲をハイドンに献呈したことなども、ハイドンとモーツァルトの結び付きを表している。ハイドンが亡くなったとき、ウィーン市民による追悼式では、親友であったモーツァルトの「レクイエム」が演奏された。

また、ハイドンは、一度目のロンドン滞在からの帰途、若き日のベートーヴェンを紹介された。ベートーヴェンはハイドンの後を追ってウィーンに赴き、ハイドンに対位法を学んだ。

[ミニコラム 2: ハイドン首なし事件]

ハイドンは、まずウィーン市内のフントシュトゥルム墓地に葬られた(この墓地は 1926 年以來ハイドン公園となっている)。ハイドンの死後 10 年たった 1820 年、ハイドンの最後の君主であるニコラウス・エステルハージ 2 世の命により、ハイドンの遺体は懐かしいアイゼンシュタットのベルク教会地下聖堂に移されることになった。そしていざ関係者が棺を開くと、なんと頭蓋骨がなかったのである！ウィーン警察の調べにより、かつてエステルハージ家の執事だったヨゼフ・カール・ローゼンバウムと刑務所所長ヨハン・ネポムク・ペーターが埋葬の数日後に頭蓋骨を盗み出したことがわかった。しかしローゼンバウムは別人の頭蓋骨を偽って返却し、本物はその後自宅で保管し、特別の人にだけ見学を許していたという。

死後は共犯者ペーターに遺産として残され、その後は彼の未亡人から医師、解剖学者(とその息子)、ウィーン大学病理研究室を経て、1895 年ウィーン市からウィーン楽友協会に鑑定と保管が依頼されるに至った。結局遺体は頭蓋骨なしのままアイゼンシュタットに埋葬され、1954 年によく一体となった。

なぜこんなことが起きたのか？それは、ハイドンの時代に「脳の器官の発達により頭蓋が形作られるため、頭蓋骨を外部から触ればその人の性格や才能、素質や職業を判断することができる」という「骨相学」が一世を風靡し、ハイドンの頭蓋骨もその興味の対象となったから、だったようである。

[ミニコラム 3: オーストリア国歌とドイツ国歌]

ハイドンは晩年の 1797 年に、ナポレオン軍のオーストリア侵攻に対抗し、人々の士気を高めるためにオーストリア国歌「皇帝賛歌(神よ、皇帝フランツを護り給え)」を作曲した。この曲はオーストリア国歌としては 1919 年まで親しまれ、そして現在はドイツ国歌の旋律となっている。